不二

四月号

日本浪曼派の問題……影山正治
『大東亜戦争肯定論』の討論

大東塾・不二歌道会

昭和四十年四月二十日印刷　昭和四十年四月二十五日発行
昭和二十一年十月十日第三種郵便物認可（毎月一回二十五日発行）

昭和四十年四月二十日印刷　昭和四十年四月二十五日発行
昭和二十一年十月十日　第三種郵便物認可

不二　第二〇巻　第四号　昭和四十年四月

不二第二〇巻　第四号　通巻第二〇三号（ひむがし通巻第二五巻・第三四七号）定価八十円

影山正治　著

民族派の文学運動（上）
―日本浪曼派の問題―

B6判　四三〇頁　定価六〇〇円　送料一二〇円
（大東会館維持会員は二割引　四八〇円　一二〇円）

今　東光（作家）
影山正治氏の労作「民族派の文学運動」御上梓を知り欣快に堪へません。小生等は若き時代、日本文学を黒い霧のごとく蔽ひかぶせた欧化文学、乃至、虚無的な私小説の愚劣さに息をつまらせ、何となく暴れ出したところ新感覚派と名づけられましたがこれは期せずして日本のロマン文学の伝統を荷ふ運命にあつたと思つて居ります。貴社がこの道を一筋に進まれてゐることを親友尾崎士郎、畏友保田与重郎の諸氏よりほのかに承り頼母しく存じて居りました。一層この道を逞ましく進まれんことを期待して止みませぬ。

橋川　文三（評論家）
著者の影山正治氏がいかなる人物であるかは、知る人は知つている。従来、たんに文学に、もしくはたんに政治にとらえられた視点からは、決して理解することのできなかつた日本の民族派文学運動の歴史と意味とを知るためには、これはほとんど唯一の、そして最後の著述ということになるかもしれない。

安津　素彦（文博）
「不二」連載の〈日本浪曼派の問題〉の前半が一冊に纒められて公刊されると聞く。これで戦前の思想史を扱つた一部の戦後のものは大きく書き改められよう。（後略）

竹内　好（評論家）
史料を保存し、公開する第一要件を充している点で著者は歴史家であります。その結果としてイデオロギィと歴史とを混同する風潮に批判を加へている点で、著者は批評家でもあります。評価は後世にまかせればよろしい。

小山　寛二（作家）
（前畧）この書はまた未来の歴史展開への暗示と示唆を深くひそめてゐる、と考へてよい。その意味からでも、ただに日本文学の脈流の一断面の記録としてだけではなく、この書はぜひとも後世に残されねばならぬ貴重な文献であると思ふ。

寄贈御禮

左記の如く大東会館に対し寄贈を受けました。厚く御礼申上ます。

○布団（上二、下二）佐藤宇助殿○布団（上一、下一）銀治栄一殿○布団（上一）安倍一生殿○スリッパ（三十足）村松輝人殿、竹中謙二朗殿○マットレス（中古一）嵯峨野夫妻殿○椅子（中古七）三浦義一殿

編輯後記

前号は七十二頁の特輯を行つたので今月号は若干減頁した。

不二　第二〇巻第四号
昭和四十年四月廿日　印刷
昭和四十年四月廿五日　発行
（毎月一回廿五日発行）
東京都港區青山北町五の二四の一〇
編輯兼発行人　鈴木　正男
東京都港區青山北町五の二四の一〇
印刷所　大東塾印刷部
東京都港區青山北町五の二四の一〇
発行所　大東塾・不二歌道会
振替東京一九〇四〇一番
電話青山(400)〇九六三番

佐藤首相は就任以来〝自主外交〟〝アジア重点外交〟の基本政策を打出し、日韓会談を手はじめに応分の努力を開始した。

戦後の日本外交が殆ど完全なアメリカ従属外交であることは余りにも世界に有名である。日本はアメリカの代理者としてアメリカの利益を守つて来た。国連での日本の行動は何度アジア諸国の失望と顰蹙を買つたことか。日本は一体アジアなのか西欧なのかと云ふのが、アジア諸国の疑問であり、怒りであつた。

日本が真に〝アジア重点外交〟を考へるならば、真に世界平和への道を熱願するならば日本は世界のためにアジアの日本でなければならぬ。アジアの苦脳は今や限界点に達せんとしてゐる。南北朝鮮の対立、国府中共の抗争、南北ベトナムの戦争、インドネシヤとマレーシヤの紛争、インドとパキスタンの憎悪、それに飢餓と貧困、アジア諸国の現実は深刻である。この深刻さは西欧合理主義や、西欧民主主義では解決しない。

政府は近くマレーシヤ紛争の調停に乗出す模様であるが、その一切の前提条件は何よりも先づアジアの日本になることである。今迄のやうなアメリカの日本であつたならば〝アジア重点外交〟は茶番劇に終る。

では、アジアの日本になるのにはどうしたらよいか。それは単なる観念や思想の転換では駄目である。今日即刻一大勇猛心を湧き起して、アメリカの日本と断乎として訣別、憲法問題と、国防問題根本解決への道へ明確に一歩を踏み出すことである。その突破口は即ち、紀元節の復活に外ならない。

あれ程、大見得を切つて政府提案になつた祝日改正法案は目下参議院に於て棚ざらしになつてゐる。このまゝ推移すれば審議未了廃案になる公算大であると云ふ。あゝ何たる事か。

建国記念日一つを十年かゝつて制定出来ないやうな国はアジアの国ではない。アメリカの国であり、ロシヤの国である。政府は自主外交とか、アジア重点外交とか云ふ前に、黙つて先づこのことを実現して貰ひたい。さもなくば誰もその自主外交を信じない。（S）

不二

第二十巻・第四号

詠草

早春賦……影山正治（二）

咋山……藤井芳人（二）

宇都宮風物詩抄……影山銀四郎（三）

畝傍山……原真弓（三）

建国祭……赤木一郎（三）

日本浪曼派の問題（五一）……影山正治（四）

——新国学協会……終戦による解体までの経緯（二）——

〝当用漢字〟の罪……細木勲（二）

——国語能力の低下を憂ふ——

倉田百三先生との大陸行（一）……窪田雅章（二）

不二歌壇……影山銀四郎選（二五）

旧「ひむがし」物故同人慰霊祭並追悼文芸講演会……（三）

大東塾創立二十五周年並十四士建碑・大東会館落成祝賀会……（三）

森岡同人結婚式……（三）

道友通信……（三）

昭和四十年度紀元節奉祝状況……

表紙……中野清韻画

あをぐもの立つや畝傍の、立つや畝傍の、山口の宮址どころ、　原真弓

神武とは神の武なりこれこそは我が日の本の真武ならじや
紀元節法制化せむ兆あり二月十一日は最も佳き日なり

むがし』の支部をつくつた」事実が語られ、終戦直後青年将校たちと蹶起上京の計画をしたことや、「やはり敗戦とともに死ぬべきではなかつたという思い」にとらはれたことなどが述べられ、その後東京に出た時、「ある日、神田の本屋で『近代文学』と『新日本文学』の創刊号をみつけ、こういう考え方の人びとも戦争を生きてきたのか、と大きな衝撃をうけた」由が記され、最後に

「わたしは政治を、いわばポエジーに還元することに熱中して来たが『近代文学』の人びとは政治をやむをえざる悪として、必要なビジネスとして文学に対置している。わたしはそこに、わたしのあまりにも観念的な政治観にたいする解毒剤をみながら、一方どこかで、これは第一義を見失つたものの論理だ、と云ふ気がしてならなかつた。そういう二重意識はかなり長いあいだつづいた。今も尾をひいているかもしれない」

と、かなり率直な感懐が附されて居た。

「終戦後二十年間の針生」が真に生かされるためには、何よりもここらで思ひ切つて一度「終戦前数年の針生」に里帰りして生命を洗つて出直してくることであらう。「解毒剤」も結構だが、二十年間も「解毒剤」ばかり飲んで居ると、完全な「解毒剤中毒」になり、「解毒剤」は逆に毒以上の毒になつてしまふ。一度「解毒剤」を投げすて、「見失つた第一義」を再発見しに行つてくることであらう。「二重意識」の高度の統一もそこからこそ生れてくるであらう。

僕は、「この針生一郎」の生命の底に流れて居る「あの針生一郎」を今もなほ信じてやまない。

『民族派の文学運動』を推す

保田与重郎（評論家）

影山さんのこの努に対し、又その情熱の発する所以に私はただただ驚き恐れ入るといふ表現しかありません。この時代のことは、いやが上にも正確にする必要があり、又この正確に立つた行動を、けふの我々が実践せねばならぬと思ひます。私は著者の記憶力と配慮に感心しました

菊岡久利（詩人）

人の子の青春は、億兆それぞれ、一つとして尊く在る。しかし、日本民族の青春を叙して渓流清冽、日本人間（につぽんにんげん）の、青年第一流を歌ふ道は、かくの如きでせう。

田中克巳（詩人）

適確なる史料であるとともに、名文にて読者を動かすこと多大と信じます。

浅野晃（評論家）

著者は昭和維新を目ざして悪戦苦闘して来た自己の足跡を回顧しつつ、いはゆる日本浪曼派の文学運動を、その周辺とその背景とにまで、周到な考案を試みている。これを一つの昭和文学史として見るとき、その史料としての価値は大きなものがあるが、さらに昭和の精神史と見るとき、いつそう貴重な記録である。

〝当用漢字〟の罪

——国語能力の低下を憂ふ——

細木勲

戦後の国語改革による「漢字制限」や「新仮名遣」などによつて教育された人々の学力の低下が、この頃、いろいろの点に現はれ、その不合理性について、各方面から意見が出されて来てゐることは誠に注目すべきで、これが国民運動にまで発展しようとしてゐることは喜ばしいことである。

戦後、〝GHQ〟といふ権力に便乗した国語改革論者による「国語は複雑で学習に困難」であるといふ言語魔術によつて国語の伝統を無視して行つた「漢字制限」「当用漢字音訓表」「新仮名遣」などで教育を受けて来た人々は、いまや自分の国の言葉を書く能力が欠けてゐるばかりか、少しややこしい文章だと意味がわからないといつた傾向になつてゐる。このままでゆけば、これからの人々は明治、大正はおろか、昭和二十年以前に書かれた日本語の本の大半はすでに歯のたたない古典となり、国初以来、国民がなして来た思考、感動の結晶ともいふべき国語の伝統から切り離されてしまふ。これは国の発展を祈る国民にとつては真に憂ふべき状態である。いま一寸、その一例をみるだけでも驚かざるを得ないものがある。

有名な文学者を父にもつ美学専攻の伝統ある東京の私立大学生からの手紙の中に「いま抗議をうけているのでとてもいそがしい」とあつた。「抗議」は勿論「講議」の誤りである。また東京の一流国立大学生の書いたものに立建政治（立憲政治の誤り）劣等観（劣等感の誤り）などといふのがあつた。また某大学では、「足の豆が可能（化膿の誤り）しました」などといふ届が出されたといふ話もある。全く嘘のやうな話ではあるが、これが事実だから驚くべき状態だ。一方、テレビをみてゐた子供が「終」といふ字が出ると「おわりの〝お〟の字だね」といつた話（「終わり」と送り仮名をするので）、或学校では「明」と云ふ字を「あか」と読む子供が相当数ゐたといふ話（「明るい」と送り仮名をするので）などと聞くと現在の国語教育の改善、充実を叫ばざるを得なくなる。

戦後「難しい漢字は撓して、わかりやすく」などといつて漢字制限を主張して来た国語改革論者がいふところの〝その余力〟を他の学問に生かして効果的であつたかどうかといふことである。この結果は当用漢字ですら読み書き出来ない状態となり、科学論文や実験報告を書くのにも難渋するやうな人々が生れてゐる。

勿論国語改革の動きは前々からあつたことで、大正年代の末に